



パトリック・コリンズ氏

# 外国人の目から見た我が国の大麻取締法制の異常

『農業経営者』セミナー

▶11月1日  
(東京都)

講師：パトリック・コリンズ氏（麻布大学環境科学科教授）

今回は、産業用麻（以下、産業用ヘンプ）の農業・産業的可能性に注目し、日本の規制に関する理解を広めるといふ趣旨で開催した。日本では「大麻」と総称されているが、産業用ヘンプとマリファナの原料になる麻とは種類が異なる。産業用ヘンプは、麻薬成分のTHC（テトラヒドロカンナビノール）濃度0・3％という国際安全基準以下の麻である。

講師を迎えたのは、麻布大学で環境経済学を研究している英国人のパトリック・コリンズ氏。コリンズ氏は、大麻取締法にとられ法改正をしない日本の政策に一石を投じた。以下、講演の概要を紹介する。

## 日本伝統の麻産業の喪失は経済競争のあり

麻は、いかに日本の文化に根付いたものであるか。規制される1948年までの1万数千年間、糸や縄、弓、餌、生地、紙、薬、燃料などの衣食住に「無事」に活用されてきた。現在も、神道や皇室行事において麻の文化が継承されている。

日本で麻の生産が規制された経緯はこうである。37年から米国ではマリファナの危険性が伝えられて生産が縮小した。さらに、産業用ヘンプと競合する製紙、林業、綿、農薬、石油、製薬などの大手企業がマリフ

アナの危険性を訴えるキャンペーンを展開すると、マリファナと区別なく産業用ヘンプの生産も法で禁止された。日本で規制されたのは戦後の48年。米国GHQの命令で日本に「大麻取締法」を導入したことによる。当時、約2万人いた生産者は十数人にまで減少し、麻産業は喪失した。この規制は「経済戦争」によるものである。

## 世界で拡大する産業用ヘンプの生産と活用

世界の産業用ヘンプの生産は急激に拡大している。近年、THCの研究が進み、マリファナとの区別が容易になったからである。きっかけは、96年にドイツで産業用ヘンプのTHC濃度に関する国際安全基準が設けられたことだ。以来、ドイツ、フランス、イギリス、ルーマニア、ハンガリー、チェコ、エストニア、カナダ、オーストラリアなどで産業用ヘンプの生産が拡大した。2013年には米国でも簡単な告示で法改正され、すぐに農業者たちが生産し始めた。すでに5000haに増えている。

海外の産業用ヘンプの活用例は現代的である。麻の断熱性や通気性などの特性を生かした建築材「ヘンプクリート」はすでに普及しており、麻を原料としたプラスチックやオー

ガニック・スチール、炭素ナノシートなどの新素材も開発されている。

さらに最新の研究により、「CBD革命」が起きている。人間が体内でつくる数十種類のカンナビノイドのうち、ある種類が不足すれば、ガンやアルツハイマーなどの病気の原因になる。産業用ヘンプの細胞は、THCの代わりにCBDなどのカンナビノイドをつくる。これが病気に効果的で、副作用もないという研究が進んでいる。

## 産業用ヘンプの栽培で地方創生へ

世界で産業用ヘンプが拡大するなか、日本はすでに海外に遅れをとっている。日本の厚生労働省は科学的根拠もなく、いまだに「産業用ヘンプは危ない」と述べている。最適な政策づくりのため、次の3つのステップを提言する。まず、各県の知事は、厚生労働省の科学的根拠のない指示よりも、県の経済、農業、健康、環境を重視する。次に、米国のように、簡単な告示だけで産業用ヘンプをマリファナと区別して農林水産省の管轄にする。厚生労働省は医療用大麻を安全に使用するための規制をつくる。そうすれば産業用ヘンプの栽培は、地方創生に大いに貢献する産業になるだろう。（談、平井ゆか）